

## 明るい危機感をもって

お早うございます。下期を迎えて、一言ご挨拶を申し上げます。

4月、令和5年度の初めにあたり、私は今年を「飛躍の年にしよう」、役員や部課長も大幅に変わり、新体制のもと、「心を一つにして目標に向かおう」と申し上げました。半年間を振り返って、色々な処でそれが実行されてきたことについて、心からお礼を申し上げます。達成度は山あり谷ありでしょうが、目標に向かって一步一步進んで行くようお願いします。

重点課題である「センターの一体化促進」については、プロジェクト・チームをベースに着実に動き出しました。時とともに、確かな成果が実ることを期待しています。初めから大きな成果を狙わなくても良い、初めは小さくても良い。手近な具体的なところから始めて、次第に範囲を広げ、深掘りして、大きく育てて欲しいと思います。大事なことは抽象的な総論ではなく、具体性を持った一步一步の実行とその継続です。各論を持たない総論は、単なる絵に描いた餅

に過ぎません。「小さく生んで大きく育てる」ことを、是非心がけて下さい。

来月の推進会議では、プロジェクトの具体的な話を聞かせてください。

一例を挙げます。私は恒例の職員と語る会を続けていますが、一体化の研修に参加した土地公社の女性職員が、道路公社のパトロールカーに初めて同乗する体験をして、「感動した」と述べてくれました。中級研修も計画されていますので、このような形で一体感が高まることを期待します。去年の伊豆スカイラインの美化、土地公社が進めている現地の視察の際にも、同じような感想が出され、心に残りました。他部門の人が何をどんな思いでやっているのかを見聞し、体験し、一体感を深めるのは本当に大事なことです。一体感なくして、一体化は実現しないと私は思います。

これまでに何度も申し上げていますが、センターの一体化は、センターと三公社の生き残り戦略です。言葉を変えれば、長寿化戦略です。最近では持続可能性という言葉が、マスコミを賑わしています。国連が音頭をとったSDGs(持続可能な開発目標)などが発端になっているので、どなたもご承知と思いますが、持続可能性とは、分かりやすい日本語で言えば長寿化に他なりません。人の寿命が長寿化したように、団体や会社の長寿化を図るにはどうすれば良いか、ということなのです。

日本は、個人の寿命が世界トップクラス(女性はトップ)ですが、会社の寿命も圧倒的に世界最長なのです。200年を超える長寿企業の数、世界の56%を占めています。世界最古の事業体は、西暦578年創業の金剛組です。何故日本にはそれほど長寿企業が多いのか。多くの研究がありますが、比較的平和な時代が長く続いたことと、「人や社会のお役に立とう」とする精神が生き続けてきたからです。殺伐な革命が続いた国では、長寿企業の存在は微々たるものです。また、有名な近江商人の「三方良し」(売り手良し、買い手良し、世間良し)は、その一つの代表例ですが、江戸時代に作られた「浮利を追わず」などの社是・社訓にもそれが現れています。経営理念です。「自分さえよければ良い」とか、社会的信用を捨てて目先の利益に走るようでは、会社の長寿化は望めません。結局それは、時々の経営者・管理監督者の倫理観あるリーダーシップにかかっているといつて良いのです。コンプライアンス(法令遵守)の大切さが良く言われますが、それは法治国家の国民、団体や企業にとっては当然の、いわば守るべき最低の基準にすぎません。それだけでは不十分で、全員がより高い倫理観を持って仕事に携わることが不可欠です。そうした時に、初めて社会はその会社なり団体を信用し、認め、支えてくれることから、結果として長寿化が実現するものと私は思います。

一体化の話が長くなりましたが、今日はもう一つの重要なお話をします。それは、伊豆中央道・修善寺道路の償還期間の延長と、静浦道路とのプール制が県議会で可決されたことです。国全体の方針として、有料道路の償還期間の延長が可決されたという大前提がありますが、本県で償還期間の延長とプール制が決定するには、議会で審議決定を得なければなりません。幸いにして地元の皆さまのご理解を得て、可決に至ったことを私は大変有り難く、関係者に心からお礼を申し上げたいと思っております。この課題解決への論議が始まった時に、私は道路部の皆さんに希望通り実現した場合と、それが実現しなかった場合のシミュレーションをお願いしました。悪い事態を想定して落ち込むのではなく、いかなるケースにおいても対処できるよう、覚悟を決めておく必要があったからです。その上で、良い結果となるよう全力を尽くそうと考えたのです。

決定権が国会や県議会にあるにしても、人頼みでは経営はできません。多くの方のご尽力により、道路公社最大の課題が良い結果に落ち着いたことを喜びたいと思います。公社の皆さん、ご苦労さまでした。

今日は、センターの一体化は生き残り戦略であること、事業の推進に当たっては最善のケースだけを念頭に置いては不十分であること、を述べました。これは、心配で眠れなくなるような「取り越し苦労」をせよ、というのではありません

ん。ましてや、過去の失敗をくよくよと悩んで「持ち越し苦勞」をしようというのでもありません。私が申し上げたいのは、様々なケースを想定して対策を準備をしながら、解決を人任せにしないで、自分でやれることは躊躇なく明るい希望を持って実行まい進することです。これはまさに、「明るい危機感」そのもので、変化の烈しい今の時代を乗り切るには、どうしても欠かすことのできない大切な心構えだと私は思います。

終わりに、いつも同じで恐縮ですが一

**明るく、楽しく、元気に、厳しく！！**

以上